

小中接続に関する中学校英語教師の意識調査

野村 幸代¹⁾、竹本 佳奈²⁾、岡田 倫代¹⁾

1) 高知大学大学院総合人間自然科学研究科教職実践高度化専攻

2) 高知大学大学院総合人間自然科学研究科教職実践高度化専攻 院生

An Attitude Survey Among Junior High School English Teachers About Articulation Between Elementary School and Junior High School

NOMURA Sachiyo¹⁾, TAKEMOTO Kana²⁾, OKADA Michiyo¹⁾

1) Programs for Advanced Professional Development in Teacher Education Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Kochi University

2) Programs for Advanced Professional Development in Teacher Education Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Kochi University, Graduate student

要約

本研究の目的は、高知県内の中学校英語教師の小学校と中学校の学びの接続に対する意識を調査し、英語教育の小中接続の課題を明らかにすることである。17名の教師に質問紙調査とインタビュー調査を実施し、データの定性的分析の結果、大部分の教師は重要性を認識していることが示された。その根拠として、授業設計への効果や、言語習得の特性、英語教育政策の指針が挙げられた。一方で、英語教育学や英語教育政策への認識や知識の不足も見られた。小中接続の重要性を認識しているものの、そのうちの半数以上が、生徒の小学校時の学びを把握していないことも明らかになった。中学校教師は、小学校で使用した教材や、生徒への聞き取りなどから小学校での学びを把握している場合もあるが、不十分な状況であることが示された。加えて、小中の学びの接続を困難にしている要因には「物理的要因」、「心理的要因」と「知識不足」があることが明らかになった。

キーワード：小中接続 小学校英語教育 教師の意識

1. 目的

本研究は、高知県内の中学校英語教師の小中接続に対する意識を調査したものである。令和2年度より、小学校3年生からの外国語教育が全面実施される。「中学校学習指導要領（平成29年告知）解説 外国語編」では次のように明記されている。「今回の改訂では、小学校中学年に新たに外国語活動を導入し、三つの資質・能力の下で、英語の目標として『聞くこと』、『話すこと[やり取り]』、『話すこと[発表]』の三つの領域を設定し、音声面を中心とした外国語を用いたコミュニケーション

ンを図る素地を育成した上で、高学年において『読むこと』、『書くこと』を加えた教科として外国語を導入し、五つの領域の言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することとしている。中学校段階では、こうした小学校での学びを踏まえ、五つの領域の言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成することとしている。」（下線は著者による）。このように、中学校では小学校の教育活動を理解した上で授業設計を行うことが求められている。加えて、外国語教育の目標も小学校から高校までの学びの連続性を意識して作成されている。

小中の学びの連続性を意識した授業を展開するためには、教師が明確にその重要性を認識している必要がある。Clark & Peterson (1986、 p.258) は「教師の計画と思考と決定の相互作用に影響を及ぼす、教師が持っている知識の豊かな蓄積」をピリーフと呼び、教師の持つピリーフが授業実践と密接な関りがあることを示している。また、Clark らは、教師のピリーフは授業が行われる環境の影響を多大に受けることを指摘し、この環境がマイナスに働くことを「制限」と呼んでいる。

以上から、小中接続に関する中学校英語教師のピリーフと、小中の学びの接続を困難にしている「制限」を調査する。本研究のリサーチ・クエスチョン (RQ) は次の3点である。

RQ1: 中学校英語教師は小中の学びの接続の重要性を認識しているか。

RQ2: 中学校英語教師は生徒の小学校時の学びを把握しているか。

RQ3: 中学校英語教師が小中接続を円滑に行うことを困難している「制限」は何か。

2. 方法

高知県内の中学校 10 校の英語教師 17 名にインタビュー調査及び質問紙調査を実施した。対象者は、男性 3 名 (20 代 2 名、30 代 1 名)、女性 14 名 (20 代 4 名、30 代 5 名、40 代 4 名、50 代 1 名) である。質問紙では、小学校教師との教育内容の共有の有無と、中学校教師の生徒のこれまでの学習内容の把握について、現状と課題を調査した。インタビュー調査では半構造化インタビューを実施し、IC レコーダーにより録音し、逐語記録を作成した。インタビューの逐語記録と質問紙調査の自由記述は定性的コーディングにより分析した。定性的コーディングとは、収集された文字テキストデータに対してコード (それぞれの部分が含む内容を示す小見出し) をつけ、内容をまとめ、要素を抽出していく分析手法である。定性的コーディングの作業を通して、対象者の「生の声」を文脈に即して「理論の言葉」としての概念カテゴリーに置き換える (佐藤、2008)。このようにテキストデータを概念化することにより、概念モデルを作ることができる。概念モデルとは、抽象的な概念の理論的な関係性を示すものである (ライアン・バーナード、2008)。調査は 2018 年 6 月から 7 月と 2019 年 6 月から 7 月にかけて実施した。なお、調査対象校責任者及び調査対象者には、本調査の趣旨に協力できない場合に回答者が不利益を被らないこと、及び結果は本研究の目的以外には使用されないことを口頭で知らせ、得られたデータを研究においてのみ使用することについて承諾を得ている。

3. 結果

TABLE 1 は「小中の学びの接続は重要だと思うか」と「小学校時の学びを把握しているか」という質問に対する回答結果である。88.2%の教師が小中の学びの接続を「かなり重要」と回答し、47.0%の教師が小学校時の学びを「把握している」或いは「やや把握している」と回答した。

TABLE 1 重要性認識の有無/学びの把握の有無

(数字:人数(%),少数点以下第2位を四捨五入)

小中の接続は重要だ	かなり重要	どちらかというと重要	どちらともいえない	あまり重要ではない	重要ではない	計
	15 (88.2)	1 (5.9)	1 (5.9)	0 (0)	0 (0)	17 (100.0)
小学校時の学びを把握している	把握している	やや把握している	どちらともいえない	あまり把握していない	把握していない	計
	3 (17.6)	5 (29.4)	2 (11.8)	0 (0)	7 (41.1)	17 (100.0)

TABLE 2 から TABLE 4 は、インタビュー調査及び質問紙調査のテキストデータをコード化し、概念化したものである。右端がインタビューの逐語記録と質問紙調査の自由記述、右から 2 番目は 1 回目にコード化したデータ、3 番目は 2 回目にコード化したデータ、左端が最終的に作成したコードである。テキストデータのコーディングは執筆者 3 人で行い、検討を重ねた。

TABLE 2 小中接続が重要である理由

定性的コード 3	定性的コード 2	定性的コード 1	テキストデータ
<ul style="list-style-type: none"> 生徒の学習経験の差の把握 	<ul style="list-style-type: none"> 複数校の学校間格差の存在。 学級間格差の存在。 	<ul style="list-style-type: none"> 小学校が 4 校あり規模が違う。 学校による差がある。 学級担任の思いによる取り組みの違いがある。 	ないよりはある方がよい。小学校が 4 校あり、大規模校から小規模校までである。学校による差、学級担任の思いによる取組の違いもあるので、引継ぎはないよりはあった方がよい。
<ul style="list-style-type: none"> 必要性の認識不足 英語教育学的知識の不足 	<ul style="list-style-type: none"> 必要性の認識の低さ。 授業への効果的な影響への期待。 	<ul style="list-style-type: none"> 引継ぎがないことの不便さを感じない。 引き継ぎ場面の設定を考えたことがない。 小学校の状況を知っていると効果的なことができたかもしれない。 	引継ぎをしないからといって不便さを感じたことはないが、生徒が「これやったことがある」と教えてくれたことがあり、もっと知っていたらもっと効果的なことができたのではないかと、思ったことがある。あえて外国語活動の引継ぎ場面を設定することは考えたことがなかった。
<ul style="list-style-type: none"> 必要性の認識有り 重要性(理由)の記述なし 	<ul style="list-style-type: none"> 必要性の認識有り。 具体的方法(授業を見合う)の提案有り。 理由の記述なし。 	<ul style="list-style-type: none"> 小学校の取り組みについての共有は大切。 中学校の思いについての共有は大切。 授業を見合うことは刺激になる。 	小学校の取り組みについて共有したり、中学校の思いについて共有することは大切だと考える。互いに授業を見合うことで、刺激し合えると思う。
<ul style="list-style-type: none"> 効果的な授業設計 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の学習意欲低減の回避。 授業設計への取り入れの重要性。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の退屈さの回避が必要。 小学校とのレベルの差が大切。 小学校との活動内容の違いが大切。 	必要だと思う。小学校と同じ活動をしていても生徒は退屈と感じていると思う。小学校よりレベルが上がったり、違った活動をするのが大切なだろうと、授業をしていて感じる。
<ul style="list-style-type: none"> 効果的な授業設計 生徒の学びへの効果 長期的な英語 	<ul style="list-style-type: none"> 授業設計への取り入れの重要性。 生徒の円滑な学びへの効 	<ul style="list-style-type: none"> 授業作りを行う上で必要不可欠。 学習内容と学習活動を共有することは生徒にとって円 	小学校において、外国語をどのように、またどの程度学習してきたかを知ることは、今後中学校で授業づくりを行う上で必要不可欠なことだと思います。語彙の種類

教育への効果	<ul style="list-style-type: none"> ・目標の共有による長期的な英語教育の効果。 	<ul style="list-style-type: none"> ・滑らかな学習になる。 ・どのような生徒を育成したいかという目標の共有は、ブレない教育活動の実施にあたって非常に重要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・や言語材料等も含めて小学校の段階で学習する内容、学習活動を共有することが中学校での学習を円滑なものにすると考えます。 ・小・中・高の教育内容の接続は英語を通して、どのような生徒を育成したいか、発達段階に応じる必要はあると思いますが、すべての校種が同じ目標を持つことはブレない教育活動をするにあたって非常に重要なことだと考えます。
・理由なし	<ul style="list-style-type: none"> ・理由に関する記述なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要。 ・今後ますます必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要だと思うし、今後ますます必要になる。
・中学校への影響（抽象的）	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校への影響がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでとは違う接続になるから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2020年から本格的に開始される小学校3年生からの英語活動と英語授業で、これまでとは違う接続になるから。
・授業設計への取り入れの重要性とその効果	<ul style="list-style-type: none"> ・授業設計への取り入れの重要性。 ・授業設計へ取り入れることへの効果。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校での積み上げの上になにができるかわかる。 ・中学校でのゴールを決める上でスタート位置を知ることが重要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小中に関しては、積み上げてきたものの上になにができるのか、ゴールのためにスタート位置を知ることが大切。またその逆で、ゴールに向けて何をしていくかを考えることも必要。
・効果的な授業設計	<ul style="list-style-type: none"> ・授業設計への取り入れの重要性。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校での学びを中学校の授業で生かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校の視点で考えると、小学校でどれくらいのことをどのようにやってきたかを知っておくことで、それを授業の中に生かせるであろうし、また、高校でどのように進めていくのかを知ること、どの程度までの力をどのようにつけたらよいのかを考えた授業ができるのではないかなと思うから。
<ul style="list-style-type: none"> ・英語教育政策方針の認識 ・英語教育学的視点からの接続の認識 	<ul style="list-style-type: none"> ・文部科学省の要請 ・コミュニケーション能力の育成のため 	<ul style="list-style-type: none"> ・中教審答申に明記されているから。 ・学習指導要領に明記されているから。 ・コミュニケーション育成のためにはそれぞれの校種が互いの教育内容を知る必要があるから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中教審答申及び新学習指導要領に、児童生徒の学びの過程全体を通じて、知識・技能が実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得され、学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要だと明記されているから。コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて適切に表現することなどの課題に対応するためには、それぞれの校種が互いの教育内容を知る必要があると思うから。
<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の学習動機を考慮した授業設計 ・英語教育政策方針の認識 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の学習動機の把握 ・英語が使える日本人の育成のため 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が英語を好きあるいは嫌いになった理由の引き継ぎや連携も必要。 ・好き、たのしい、わかる、から学びたいという意識につながるから。 ・英語が使える日本人を増やすためには小中高の接続は不可欠。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校で英語を学んだ生徒になってきたので、英語に対して以前のような抵抗感はかなり減ってきている。しかし、英語に対して「嫌いだ」という強い意識をもつ生徒がいることも確かである。「なぜ英語好きになったのか」「なぜ英語嫌いになったのか」という引継ぎや連携も必要だと感じている。それは、中学校から高等学校への接続も同じことが言える。接続に関して、教材や教具の接続に視点をおいている場合がたくさんあるが、やはり、「好

			き」「楽しい」「わかる」から「学びたい」という意識につながるものが大いにあると考える。意識の部分が教材や教具につながっていることも確かだが、多角的に考えて、英語が使える日本人を増やしていきたい。そのためには、小・中・高の接続は不可欠だと考える。
・言語学、英語教育学に基づく重要性の認識	・言語習得論に基づく英語教育の系統性の認識	・言語習得には、実際の活用と言語知識の系統だった長いスパンの学習が必要。 ・言語使用の環境設定のため、小中高の教育内容の接続があった方がよい。	言語を習得するためには、習得する言語を実際に活用すること、その言語の語彙や文法などの知識の獲得という側面があり、その両方とも系統だった長いスパンの学習が必要である。日本のように母語以外の言語を日常的に使用する必然性が低い場所でその言語を習得するためには、その環境を準備する必要がある、小中高の教育内容が接続されている方がよい。
・授業設計への取り入れの重要性とその効果	・授業設計への取り入れの重要性。 ・授業設計へ取り入れることへの効果。	・もっと学びたいと生徒が思うことを中学校の授業で生かせる。 ・楽しかった活動を中学校でも取り入れられる。	外国語活動を通して、もっと学びたいと思ったことや、楽しかった活動などを確認しておけば、それに近い活動や目的を持って、中学校での授業を展開していける。
・授業設計への取り入れの重要性とその効果 ・生徒の学びへの効果	・授業設計への取り入れの重要性。 ・生徒の円滑な学びへの効果。 ・授業設計へ取り入れることへの効果。	・楽しかった活動を中学校でもレベルアップして取り入れられる。 ・力がついたと感じたことをさらに伸ばせる。 ・生徒が頑張れる。	やってみて楽しかったこと、力が付いたと感じたことを聞き、中学校でそれらを活用し、レベルアップした活動だと生徒が頑張れるかな。

TABLE 3 小学校時の英語学習の把握

定性的コード3	定性的コード2	定性的コード1	テキストデータ
・小学校の教材	・小学校の教材の活用。 ・既習表現。 ・小学校時の活動。	・小学校の教材を用いて、既習表現や小学校の活動を思いださせる。	中学校で学習する言語材料が載っている <i>Hi, Friends!</i> のページを見せて、既習表現や小学校での活動を思いださせ、導入している。
・小学校の教材	・小学校の教材の活用。 ・既習事項。 ・活動内容。	・小学校の教材のデータを用いて既習事項、活動内容、表現を思いださせる。	<i>Hi, Friends!</i> のデータが授業で使えたときには、生徒に見せながら、学んだこと、活動内容、表現を思い起こさせた。
・生徒の発話からの推測	・生徒の表現から学習内容を推測。	・生徒の表現から、小学校時の学習事項や誤りを見つけている。	I am ではなく I'm と短縮形を使っている。I have a まだがひとまとまりになっている。
・生徒からの聞き取り	・生徒からの聞き取り。 ・活動内容。	・活動内容の概要を生徒に聞く。	何をどんな活動でやったことがあるか、ざっくりとした内容を把握する。
・生徒からの聞き取り	・生徒からの聞き取り。 ・活動内容。 ・英語への意識。	・小学校時の活動内容や意識を生徒に聞く。	小学校でどのような活動をしたか。小学校のときの英語に対する意識。

・生徒からの聞き取り	・生徒からの聞き取り。 ・活動内容。 ・英語への意識。	・小学校時の活動内容や好き嫌いを生徒から聞く。	小学校でどのような授業をしていたか、ゲームなど。英語が好きだったかどうか。
・生徒からの聞き取り	・生徒からの聞き取り。	・活動内容を生徒から聞く。	ALT とのゲーム。取組内容に小学校間で差がある。

TABLE 4 小中接続を円滑に行うことができない理由

定性的コード3	定性的コード2	定性的コード1	テキストデータ
・引継ぎシステムの不在	・英語教育の引継ぎシステムがない。	・教科に特化した引継ぎシステムがない。 ・生徒理解に関する引継ぎはある。	教科のみで引き継ぐシステムがない。生徒理解的な内容、家庭状況、生徒の課題についてが主である。
・引継ぎシステムの不在	・英語教育の引継ぎシステムがない。	・教科に特化した引継ぎシステムがない。 ・生徒理解に関する引継ぎはある。	外国語活動の引継ぎをしたことはない。そもそも設定されていない。全体で子どもの様子や学習面について、小学校との細かい引継ぎは行っている。
・引継ぎシステムの不在 ・教科内で共有なし	・引継ぎの詳細は不明。	・教科主任がやっているとと思う。	できていない。いつかは分からないが、教科主任が行っていると思う。
・交流の少なさ ・引継ぎシステムの不在	・接触機会が少ない。 ・英語教育の引継ぎシステムがない。	・小学校教員と接する機会が少ない。	できていない。4月以降、小学校教員と会う機会がない。
・交流の少なさ	・交流の場がない。	・研究会に小学校教員が参加していないため場の設定が難しい。	町教育研究会などに小学校教員が参加しておらず、場の設定が難しい。
・授業交流あり ・引継ぎなし	・引継ぎはしていないが、小中の交流会がある。 ・お互いの授業を知る機会がある。	・引継ぎはしていない。 ・小中交流会に外国語部会があり、研究授業に参加したり授業について話したりする機会がある。	引継ぎまではしていないが、小中交流会に外国語部会があり、互いに授業について話し合ったり、研究授業に参加し合ったりする機会がある。
・交流の少なさ	・接触機会が少ない。	・小学校教員と接する機会が少ない。	小学校教員と関わる機会が少ない。
・遠慮 ・地理的要因	・教員同士の遠慮がある。 ・校区が広い。	・双方の教員の遠慮がある。 ・校区が広いため回れない。	小・中学校教員どちらも遠慮している。校区の小学校が多く、回ることができない。
・教師の専門性の不足	・指導の見通しが持てない。	・教員が指導の見通しがなかったため生徒にも聞いていない。	できていない。教員自体が見通しをもっていないため、聞いてない。自己紹介をすると生徒が知ったときには、小学校でやったよね、というような話はした。
・曖昧情報による主観的判断の回避	・先入観を避ける。 ・生徒の回答が抽象的である。	・先入観を持ちたくないため聞かない。 ・勝手にできると判断したくない。 ・聞いても、生徒は具体的に答えられない。	「～はもう小学校で学習しているからできる」という先入観を持ちたくない。実際小学校で何を学んだかということに対しては、中1はあまり具体的には答えられないため、「外国語活動でどのようなことをしたか」ということを確認することで、教師側が「できる」と判断してしまうことは危ないと思う。

4. 考察及び今後の課題

RQ1: 中学校英語教師は小中の学びの接続の重要性を認識しているか。

TABLE 1 からは、88.2%の教師が、小学校と中学校の学びの接続を重要なものと考えていることがわかる。FIGURE 1 は、TABLE 2 の定性的コーディングによって、教師がそのような考えている理由を概念化したものである。ここから、小中の学びの接続を重要だと考える根拠は 3 つに分類できる。1 つ目は「効果的な授業設計」に役立つというものである。生徒の学習経験（学習内容・学習活動・英語に対する情意）の把握、第 2 言語習得論に基づく英語学習の特性、中学校の指導のスタートとゴールの設定などが、中学校における英語教育の効果的な授業設計に寄与すると考えている。2 つ目は、国の「英語教育政策」を意識しているというものである。学習指導要領、中教審答申などの政策による英語教育の指針に対応する必要性を感じている。3 つ目は、理由がない、或いは曖昧である場合である。これは、英語教育学、或いは英語教育政策に関する知識不足や認識不足が推察される。また、学びの接続の重要性を認識していないという回答の回答理由からも、英語教育学或いは英語教育政策に関する知識不足や認識不足が伺える。

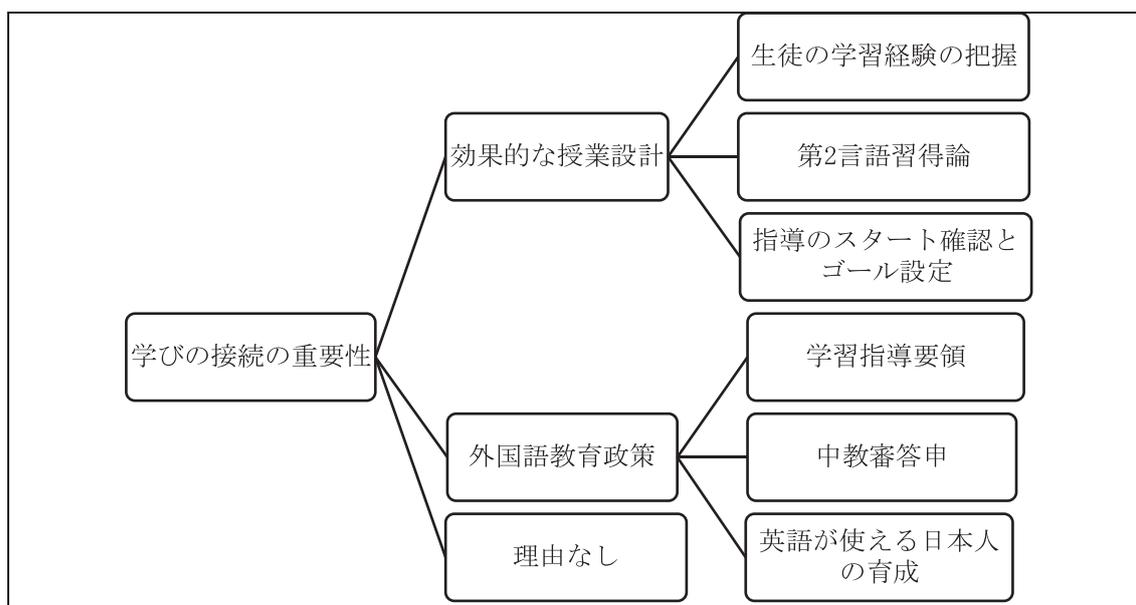


FIGURE 1 小中の学びの接続が重要であると考え理由の概念モデル

Q2: 中学校英語教師は生徒の小学校時の学びを把握しているか。

TABLE 1 と TABLE 3 から、47.0%の教師が、生徒の小学校時の学びを把握しているということ、その手段が小学校の教材と生徒への聞き取りが主たるものであることが示された。「小中の学びの接続が重要ではない」と考えている教師がいないにもかかわらず、「小学校での学びを把握している」と回答した教師は半数に届かなかった。小学校の教材を用いた既習事項の確認を行っているという回答は 2 名であり、小学校の教材はあまり活用されてはいなかった。また、生徒への聞き取りからどの程度の情報を収集できているのかという点はわからなかった。この調査からは、中学校教師による生徒の小学校時の学びの把握は不十分であり、把握している場合でも、その程度は教師によって異なることが示された。

RQ3: 中学校英語教師が小中接続を円滑に行うことを困難にしている「制限」は何か。

FIGURE 2 は TABLE 4 と FIGURE 1 に基づいて、中学校教師が小中接続を円滑にすることを困難にしている「制限」をモデル化したものである。小中接続を困難にしている要因は3つある。1つは「物理的要因」であり、教科に特化した引継ぎシステムの不在や、小学校教師との交流の機会の少なさ、校区の広さが挙げられている。2つ目は「心理的要因」であり、小学校と中学校の教師双方の遠慮や、生徒の学びに対する主観的判断を避けたいというものであった。教師の小中接続の重要性の認識が高まれば、これらの心理的要因による困難度は低くなることが想定される。3つ目は「知識不足」である。FIGURE 1 で示したように、小中の学びの接続が重要であると考えていても、教師にその根拠となる知識が十分でない場合があることが推察される。また「教員自体が見通しをもっていないため、聞いてない。」という率直な回答もあった。これらの要因は、養成機関や研修機関の意識的な努力により軽減できる。これらの機関は、英語教育における小中の学びの接続の重要性を、言語教育学の視点に基づいて強調していく必要がある。

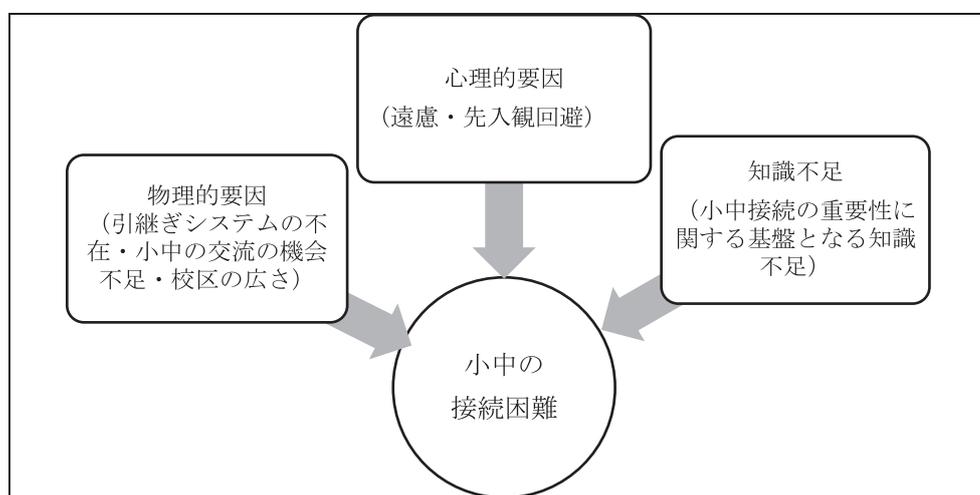


FIGURE 2 小中接続を円滑に行うことを困難にしている「制限」の概念モデル

本研究は、高知県内の中学校英語教師の小学校と中学校の学びの接続に対する意識を調査し、英語教育の小中接続の課題を明らかにした。今後の課題として3点を挙げる。第1に、調査対象を増やすことにより、データの信頼性を高めることである。第2に、小学校における学びを把握していると回答した教師が、何をどの程度把握しているのかという具体的内容の調査が求められる。この点を把握することにより、小中の学びの接続の現状をより詳細に検討することができる。第3に、FIGURE 2 で示された3つの要因の解決法の探求である。そのためには、市町村の教育委員会への聞き取りや、中学校教師への構造化インタビューの実施が必要である。

謝辞

ご多忙の中、インタビュー調査及び質問紙調査に応じて下さった高知県内の英語教師の皆様に深く御礼申し上げます。

文献

Clark, C., & Peterson, P. (1986). Teachers' thought process. In M. Wittrock (Ed.), *Handbook on research on teaching, 3rd Ed.* (pp.255-296). NY: Macmillan.

- 文部科学省 (2018) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語編』 東京：開隆堂.
- ライアン, G・バーナード, R. (2006) 「データ処理と分析方法」 デンジン, N. Y.・リンカン Y. S.
(編) 平山満義 (監訳) 大谷尚・伊藤勇 (編訳) 『質的研究ハンドブック 第 3 巻 質的研究
資料の収集と解釈』 (pp.165-190) 京都：北大路書房.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法』 東京：新曜社.

